

目的 興味本位の性情報が氾濫している。人間の生き方や家族関係のあり方に深くかかわる問題として、思春期における性教育はとりわけ重要である。学校は性教育の中心的な役割を担う場であると考えられるが、親子そして夫婦という関係のなかでなされる性教育も重要である。性を抑圧的にではなく、肯定的・多面的にとらえる必要がある。そのような観点から、異性に関心をもち始める時期である中学生について、男女交際への関心と行動の規範、性についての関心内容と情報源、教師や父母との対話、父母との対話に影響する要因などを調べ、中学生の性意識の発達と親のかかわり方を検討した。

方法 北九州市内の公立の中学校の生徒を対象に、1990年12月に調査を行った。学校を1カ所に絞り、年齢による発達状況と男女差を明らかにすることにした。1年210人、2年190人、3年193人で、各学年とも男子と女子が約半数ずつである。

結果 男女ともに、1対1の交際相手がいる者とした者が3年では3割、それに、交際を望む者が1年でも3割いる。1対1交際に対して、男子主導型の考えをもつ者がすでに半数近くいる。行動の許容範囲は男女差が大きい。主に雑誌が性の情報源になっている。男女交際のし方や恋愛などの項目でとくに関心が高いが、教師や親との対話は乏しく、親と話したことがないという者が女子では5割、男子では7割もいる。男女交際のし方や恋愛についての親との対話の有無と、1対1交際を親に話すことを支持する意識との間で相関がみられる。親との対話の有無に、日常の会話頻度以上に親の夫婦としての親密さが関係し、父の家事参加が親密さを強める要因になっていることが注目される。